



元日本代表サッカー選手
横浜FC(横浜フリエスポーツクラブ)代表取締役会長

奥寺 康彦さん

日本で第一号のプロサッカー選手であり、海外リーグでも活躍された日本のサッカーのパイオニアである奥寺康彦さんに、ご自身の経歴、海外でのプレー経験、そして日本代表などについて語っていただきました。(聞き手・構成：高橋辰三、伊藤敬史)

—— 奥寺康彦さんは、日本で最初のプロサッカー選手だという形で紹介されることが多いのですが、奥寺さんの世代が最初にサッカーを始めた経緯をお聞かせいただけますか。

僕らのときは今から50年ぐらい前の話なんだけど、サッカーはもちろん周りはやってなかったし、野球も確かにリトルリーグとかそういうのはあったんだけど、でもそれもほとんど入っている人が少なくて、中学に入ってから初めて部活というのがあって、そのときに友人に誘われて。

やったことないんだけど、軽い気持ちで入ったのがサッカー部だったんだよね。

—— 初めてサッカーをしたのは中学になるのですか。

最初の1年間というのはボールも蹴れないし、先輩が蹴っているやつを僕らが拾ってボール拾いをしたりとか、基本的な練習はさせてくれたんだけど、最初は全然何もできなかったよね。

走るのがきついし、嫌だったよね。合宿もあるんだけど、夏の合宿とかって、それを乗り越えられたからよかったのかなと思うね。横浜の学校なんだけど、中学で2年生とか3年生になって強くなって、それで強い学校に推薦で呼ばれていった。

—— その当時、職業として、プロ選手としてサッカーを視野に入れていましたか。

僕らのときはそんなのは一切なかった。仕事をしながらサッカーをする。だから大企業に入る。例えば三菱さんだったり、日立さんだったり、古河電工もそうなんだけど、そういうところに入るのが一番高いレベルでサッカーができるという場所だったんだよね。

—— その中で所属されたのは古河電工ですね。

うん。高校3年生になって選択しなきゃいけないんだよね。もっと高いレベルでサッカーをしたいなということで古河電工に入りたいなと。だけどそう簡単に入れるわけじゃないし、だから僕の知り合いのコネを使って、まず僕のプレーを見てもらいたいということで練習に参加させてもらって。

—— いわゆる会社の仕事というのはされたのですか。

しましたよ。僕が入ったときは横浜に大きな工場があったんだよね。そこに勤務して。当時は1日置きに練習があって、練習のない日は仕事を1日やったんだけど、練習のある日も午前中だけ仕事をして、午後は練習ということでやらないとできなかった。本当、残業もやって徹夜もやったりしていたし。

—— サッカーの練習と仕事との両立についてどういう気持ちでしたか。

それは当然のことだと思ってやっていたし、全然不

満もなかったし、先輩もそれをやっているわけだから。ただ、逆に僕らが練習で行っちゃうと、あとは残っている社員の仲間たちがやるわけで、やっぱり負担をかけているなという、逆にそういう気持ちがありました。

その後、古河電工がブラジルに留学生を出したいという話があって。ブラジルのパルメイラスというところに留学させてもらった。2カ月間。それが僕の大きなサッカーにおける飛躍につながったと思うね。

——具体的にはブラジルで得たものは何でしょうか。

もともと僕自身は足が速いし、左キックとか、シュート力があったのですが、自分の不得意なところはボール扱い、どちらかというと柔らかいドリブルだったり、柔らかいボールコントロールだったり、そういうのはあんまりうまくなかったのね。でもやっぱりブラジルというテクニクの最たるところなので、そこへ行けばもしかしたら学べるかなと。

——ブラジルから戻っての日本でのサッカー生活は、どうでしたか。

帰ってきて古河で2年半ぐらiyorのかな。チームも日本リーグで優勝したり、天皇杯で優勝したり、あとカップ戦、リーグカップみたいなのがあって、それも優勝して3冠を取った。自分自身も、もともと日本代表にいたんだけど、途中で腰を悪くしてそれで外されて、治ってからブラジルに行かせてもらって、それでよくなって、また日本代表としてプレーできるようになったんだよね。

それでドイツに行くわけだよ。ドイツに行って、それも合宿。向こうでキャンプを張って、向こうのチームと試合をしよう。だけど向こうに行ったらプロチームとさせてくれないし、してくれないわけだよ。向こうのアマチュアのチームと試合を組んでもらって試合をするわけだよ。そのほかは、向こうにスポーツシュレ（グラウンドなどの競技用スポーツ施設、宿泊施設を備える総合スポーツセンター）ってあって、グラウンドがあるからそこに泊まりながら練習させてもらうとか。

その中で、日本代表監督が僕が行く1.FCケルンというチームの監督と昔から仲がよかった。代表の監督は三菱重工の監督だったのね。代表の監督になる前に。三菱のときにしょっちゅうそのチームに選手を送っていたわけ。それはメンヒェングラートバッハという小さな

町なんだけどね。そういう関係もあって我々のことを面倒見てくれたり、試合を組んでくれたりとか。

それでだいたい選手20人ぐらい行っていたから、これが5人一組で4グループに分かれているの。4グループに分かれて、ヘネス・バイスバイラー（ドイツのサッカー指導者）の教え子たちがやっているクラブに合宿というか、練習に参加させてくれるということをお願いしてくれた。だから、じゃあ、君のグループはあそこに行って、君はあそこに行って、という具合に、僕はバイスバイラーのチームの1.FCケルンに他4人と行ったわけ。

そうしたら、向こうもたまたま左サイドのいい選手を探していたわけだよ。ベテラン選手が引退するということで探していた中で、僕のプレーが目にとまったみたいで、それで来ないかという誘いが来た。

——その誘いに対しては迷いはありましたか。

もう25歳になって嫁さんもいたし、子どももいたし、サッカーをすることにに関してはあんまり迷いはなかったよね。ただ、向こうに住むということに関しては結構迷いがあって、何が迷うかって、言葉ができないことだよ。英語で言えるわけじゃないし、向こうの監督は単身じゃなくて家族で来いと言っているし、行ってもし家族に何かあったときにどうやって説明したらいいか。そういうネガティブなことを考えるわけだよ。そういう迷ったことを監督に話をして、だけど向こうの監督は、必要だし、来いと。あんたが迷っていることは、言葉ができないのはすぐできるし、奥さんも子どもたちもあんまりそういうのは問題ないと。僕らは君のことを必要としているから来い、と言われ決心をしたんだよね。

——チームメイトとのコミュニケーションは？

取れないさ、それは。やっぱり言葉が分からないとコミュニケーションは取れないし、向こうの言っていることも分からないし、試合中でも練習中でも、片言のこと、例えば後ろに敵が行ったよとか、そういうのは分かるけど、詳しくは分からないわけだよ。ただ、そうはいったって試合に出なきゃいけないわけだから、そうなってくるとやっぱり周りの選手のプレーの特徴だったり、そういうのを見て、ああ、こいつはこういうことが好きなんだとか、これは苦手なんだとか、そういうのを感じながらプレーしたし、試合に出ても、

最初はボールが来なかった。

——ケルンでプレーをしてみて、チームメートのレベルについてどういうふうに感じられましたか。

レベルの違いというのはそんなに感じなかった。僕の手持っていないものを彼らは持っているし、俺が持っているものを彼らは持っていないんです。例えば中盤の選手、テクニック、パスがうまかったり、それは彼の特徴であって、僕は足が速くて突破してチャンスをつくるのが特徴なので。だからそういうところが僕の生きる道だった。

——ドイツでのプレーを通じて得たものは何でしょうか。

僕らはアマチュアでやっていたわけだから、その違いというのはすごく歴然としていて、やっぱりアマチュアというのはしょせんアマチュアなんだよね。陸上とか単独スポーツはどうか分からないけど、サッカーにおいてはしょせんアマチュアなので、一応趣味の段階でやっているとは思ってくれないわけだよ。

でもプロというのは職業だから、やっぱりいい結果を出さないと評価されないし、もちろん人間だからいつもいいプレーができるわけじゃないけど、でもやっぱりそれをいろいろ言われながらも何とかみんなが応援して、勝つためにプレーするというのが向こうのプロの選手たちの姿勢だったかなと思うんですね。すごい地域の人に愛されて、応援されているなというのが、地域密着なので。だから試合になると地域対地域の戦いみたいなものだから、サポーターがあれだけ盛り上がって、昔は結構喧嘩したりとかしたんだけど。

——話題は変わりますが、Jリーグが開幕したときはどんなふうに受け止めていらっしゃいましたか。

1993年にJリーグがスタートしたら、すごく面白かった。今みたいにうまくはないけど、一生懸命なのよ。だから見ている人もすごく感動したし、盛り上がったんだよね。プロができるということは、スポーツ選手だけでなく、マスコミも、商品も、いろいろなものが付いてくるよね。また作れるよね。アマチュアでは誰も寄ってこないんだよ。プロリーグを作ると、選手の意識も変わるし、周りの意識も変わってくる。そういう部分では大成功とは言わないけど成功の部類じゃないかな。

——そんな中で、奥寺さんは、初めはジェフ市原に関わりましたね。

ジェフ市原で、最初はGM (General Manager) をやって、1996年に1年だけ監督をやらせてもらった。

Jリーグができて、最初は選手たちのモチベーションが高くて、一生懸命いいプレーをして、周りを引き付けるようなものがあったわけだよ。でも、みんなプロを経験していないから、プロって何ぞやってというのが分からなかった。選手たちもだんだん天狗になってきた。高校を卒業したばかりの選手が2,000万円ぐらいもらう時代だったんだよ。勘違いするよね。それでもう変なプレーばかりして、面白くなくなったわけだよ。それで衰退していく。でも逆に日本代表はよかったね。ドーハの悲劇で、1994年のワールドカップ・アメリカ大会に行けなかったけど、あの時はラモスを中心にカズもいて、本当にいい選手がそろっていた。1998年にはワールドカップに行けたし、その後も日本で開催されたし、代表チームは、アジアでは押しも押されぬ良いチームになったと思いますね。

——現在の日本代表チームの世界での位置について、奥寺さんはどうお考えでしょうか。

この前のブラジル大会を契機に、日本のサッカーはちょっと行き詰まったかなと思う。確かに、いい選手はいる。海外にもたくさん行っている。それを今後支えるのは若手の選手になってくるよね。U17もU19も、アジアでも勝てないという結果が出たじゃない。もう1回日本のサッカーの指導方法を見直す必要があるかなという気がする。技術だけの問題じゃなくて、メンタル面とかフィジカル面とかがちよっと弱くなってきているんじゃないかと思うね。うまさがあるのはいいとしても、戦う姿勢は弱くなっている気がするよね。

今はまだ海外に行っている選手が多いから、もしかしたら乗り越えられるかもしれないけど、国内で残っている選手のレベルが低くなっているのも事実なので、その後が心配だよ。

——南アフリカ大会の時にベスト16という成績を残して、次のブラジル大会では、海外で活躍している選手が増えて、より強くなったと思っていたのですが、結果が出なかったというのは何が要因でしょうか。

きっとチームになっていなかったんだよ。何人かの選手は突出してやっているんだけど、他が付いていない。

南アフリカ大会の時は、チームになっていたんだよ。岡田監督がチームをつくったわけだよ。みんなで戦う、誰にも文句を言わせない、これができなかつたら要らないというぐらい。

でも、ジーコも、ザッケローニも、それができなかったんだよ。なぜかといったら、ジーコの時は中田がいて、ザッケローニの時は本田がいて、結果は似ているでしょう。彼は一生懸命やったけど、他は付いていなかったのか。本当にチームとして戦ったのかだと思うよ。

——日本代表が強くなるためには、どうすればいいのでしょうか。

チームづくりだね。1人が突出していても、それがチームの中に入っていくかどうか。または、この人が中心だったら、周りがその人に付いていけるかどうか。チームとして二十何人で戦うんだから。それができて優勝したのがドイツだよ。誰が出てきても同じことをやるわけだよ。チームとしてそれができているか、統率されているか。

マラドーナが選手だった時、アルゼンチンはワールドカップのメキシコ大会で優勝したんだけど、その時の監督に、マラドーナに自由奔放にやられたらダメだっただろうという話を聞いたことがある。確かに、マラドーナのチームだったんだけど、それは周りに動ける選手を入れて、マラドーナを中心としてやれるようなチームづくりをして優勝したわけだね。本田のせいではないけど、ブラジル大会では、そういうチームづくりができなかった。

——最近、外国人の監督が続いていますけれども、それについてどのようにお考えですか。

岡田はやれたけど、他の日本人が代表監督になったときに、海外のトップクラスでやっている選手たちをコントロールできるか。そこだけだよ。選手は、マンUとかバイエルンとか、バリバリの強い相手と戦う経験をしているわけだ。海外の実績のある監督の方がそういうことは百戦錬磨なので、うまくコントロールできるんじゃないかという考えだと思うよ。

——逆に、岡田監督のよかったところは何でしょう。

みんなに自分の言うことを聞かせたということだよ。

例えば、フランス大会でカズを外した。カズは、あの時、中心選手だったのに、彼を外したわけだよ。なぜかといったら、スタメンで使わない可能性が高いから。そうなったときに何が起るかを考えた。あれだけの選手をあそこまでいって外したというのは、よっぽどの強い意志とか、何を言われても構わないという感じがなければできない。それはすごいと思うよ。

——個々のスポーツ選手の代理人として弁護士が入ることも増えてきていると思いますが、それについてはどのようにお考えですか。

いろいろな契約問題に関して代理人が入るのは、いいと思いますね。

ただ、選手を守ってあげるということに対してはいけど、逆に代理人が選手を使ってしまうようなことはやめてほしい。選手が動かないとお金が入ってこないから、代理人が煙を立たせて移籍させて。本当にお金だけでいいのかなということを考えてほしい。選手は残ってやりたいんだけど、出て行かざるを得ない。でも、本当に向こうでうまくいくのか。せっかくここでチームとして成り立っているのにということもある。

日本では少ないと思うけど、起こりがちなので、僕は代理人には選手を守ってあげられる人になってほしいと思いますね。

——本日はどうもありがとうございました。

プロフィール おくでら・やすひこ

1952年生まれ。秋田県出身。横浜FC（横浜フリエスポーツクラブ）代表取締役会長。1977年、旧西ドイツの名門チーム「1.FCケルン」から日本人初のプロサッカー選手としてデビュー。帰国するまでの9年間、ブンデスリーガ（西ドイツ1部リーグ）で通算235試合に出場し、25得点をあげ、日本で初めての「世界に通用するプロサッカー選手」として活躍。1986年に帰国し、古河電工とプロ契約、日本国内最初のプロサッカー選手となる。現役を引退後、東日本古河サッカークラブ（ジェフユナイテッド市原）のゼネラルマネージャーに就任。同チームのスーパーバイザー、監督を経て、サッカー解説者として活躍するが、2002年ワールドカップ・横浜開催準備委員などを務める。1999年横浜FC設立当初よりゼネラルマネージャーを経て、2000年11月代表取締役ゼネラルマネージャーに就任。2006年4月より現職。2012年に日本サッカー殿堂入り、2014年にAFC（アジア・サッカー協会）殿堂入り。